重修真書太閤記

九編

十

13
459
90

加藤野屋

浮世流行

18特
門外書
459
巻 90

消 帝国図書館蔵

重修眞書太閤記九編卷之廿八

本多平八郎忠勝砂川押の事
并永井與四郎馬を取返ひ事

去程ゝ羽柴宰相秀吉卿ハ三万餘の大軍を引率し
ゐ長久手の原へおし寄勝わこつゝる參州勢と
打碎き戰死をし森池田ゝ供養ゝそのへまゝ敗軍
をし三好孫七郎の恥辱を雪めんと道と急き軍勢
を押とゞける処ゝ本多平八郎忠勝ハ小牧山の御留
主居として在けるゝ長久手の軍三州方勝利と承
ゝ然ハ秀吉卿必定長久手へ進發あるへし左あ

同攻會印

らハ味方の勝敗心元なしとおのゝ樂田と襲ふて秀吉卿の本陣と燒立てゆと説〻らとも石川伯耆守よ妨げらるゝて其計策おゝふられぞ去ハ秀吉卿の後陣よ喰付軍して長久手著陣の期を延しかハ其内よ參州勢まゝ御ユ夫もあるへしと思ひ付しまゝ六百餘の勢と二つよ引とけ三百餘まてハ小牧山の御留主居と酒井松平の人々と共よ守らを三百餘と以て秀吉卿を追うけらう敵ハ三万餘と成よ俄よ出張わうしとなう先鋒次鋒の埒次もなく前隊中隊後隊の部配もまとろなゝんとおのゝの外先ハ鉄炮足輕幾組となゝ立並へその間々よ弓

長柄の足輕とゝう入まゝ長柄足輕の其間へ鉄炮と組入弓足輕の間よ長柄鉄炮とさゝそさゝ行列みさゝびその次第法あう其進退まとよ鶩を遣ふう如く組糸のとゝ忠勝おゝとみて實も秀吉卿ハ凡人すてハ無うけう我三州の軍たて昔ハ何とかく道とも押けるう武田入道信玄と度々のをう合よ弓鉄炮を組合そることを考出しゝ又ハ旗の手のかひくよろうて道の吉悪と廣狭と知たう隨分秘藏の車よすつるよ秀吉卿の陣押そおゝしも違て常山の蛇といふハ先鋒後鋒とおゝ分ゆゝ時後鋒よ敵あとハ先鋒うへゝ討先鋒よ敵あとハ後鋒と

そこゝろ中軍ゑ敵あるとい先後つゝこ討へ〳〵又廣き処ゑそい環のゝうあさう如〳〵狹き処ゑて一人立あるひハ道々も行列を立へ〳〵ハれを得たる人東國ゑてハ我君ゑゝ外ゑまゝ有へ〳〵とも覺えび然らハ西國ゑハいまさ知人あるゑゝとおのひつゝゑ此人くゝ知たりけゑ但我國ゑゝ傳えし人ハ誰あるらん心ゑゝさと限りゑ〳〵とハいへ真ゑ我君の得ゑ〳〵道と同〳〵きゝうて其進退をためして見くゝやとおもひ定め梶金平永井與四郎三浦九兵衛と呼近付其方ともハ何とゝ見つる秀吉卿の陣お〳〵の様ゑをあゝ〳〵けゑといくれ〳〵ゝハ三浦九

兵衛されハひ先刻ゝゝう目を付て見ひゑ當御家ゑて秘さをゑ〳〵備立と心付ひと申をハ永井與四郎何さゑ九兵衛のいくゝ如〳〵常山蛇の行列ゑゝと云を聞て梶金平何とゝて秀吉卿ゑハ此道を得らゑとひつゝんさうなゝゝ似ゑる計りて眞の進退い如何あゝん某ためして見ひへ〳〵といひもあえハ梶金平秀吉卿の先鋒の六七とおゝ〳〵き処とくゝゑゝ四町くゝゝをとおゝ〳〵くゝ鉄炮を三十餘挺つゝへ放〳〵ゑゝあちけゑハ秀吉卿の先鋒ゑてゝ應の鉄炮五十餘發ゝゝくゝ梶金平平八郎ゑ向ひ御覽ひゝ秀吉卿の先鋒の應いゝゑも心ゑ

くゝはとゝ忠勝も眼前に見ることなりさまこゝハ
されハ實に當家の御備立と似たり今少し試ひへ
と申さるゝ〜うへ金平山の尾前の林のかけとゝ小
楯によとり五六騎と真先にたて〜長柄を揃へ只今
突掛る勢をなすけるに秀吉卿の先鋒にて會圖の
小旗と振おこきへ二鋒三鋒うけ繼て總軍ひとし
く擡〜長柄とあ〜立たり忠勝ゑとと見るあり正
〜當家の御軍法と傳へ〜人のあるあらん左も
なくそうそうと一致いとつさ道理なり〜忠勝
の勢ハ三百餘下々うけて千餘人なり秀吉卿の三
万餘人その中に主ハ六千あまりとたゝうに知

然へ我一人を以て敵二十人に向ふ〜〜天晴面々
ハ一人當千とあのひ〜〜に〜〜つゝに一人に廿人手
に足ゑと其心〜〜と下知〜〜忠勝兜の緒
をしめ〜いつもとも等〜〜上帯〜〜〜〜直〜
兜と取て着ようとの〜〜錦の鞘をとり〜弓の弦く
ひ〜〜矢帀とさて腰たへつ〜秀吉卿とその間
一町こうに押あ〜〜ハ少〜も下らず進ゆく秀
吉卿あとと御覧〜て正〜〜三州勢と見請こう誰
ようあ〜〜ん我勢と押あ〜ひとあ〜もあ〜氣色
なくともをれハ我勢に喰うらんする勢と見を
るとの氣あけあさ名字を知つるのやある旗の

紋さてさうなるぬい軍と持うとて〳〵と軍と持ぬ
と知とてさう是ハ正う長久手の加勢のこめう小牧
山のう出立のなうと宣つい稲葉入道一鉄そく
そのう彼い本多平八郎忠勝うハ入道元亀元年六
月廿八日江州姉川軍の時彼と共う越前勢を切崩
〳〵てい其時廿三歳と申つうこい今ハ三十七歳嗚呼
目さまつさ勇士うか入道をそう六十九歳多くの
武士と見ていう平八わとの大膳不敵のの又ある
〳〵とあわえびいと申上〳〵うハ秀吉卿何さう眞
柄と討〳〵覺のの彼う勢ハ三百の内外と見ゆる
う我勢と並ひつ〳〵押行心そおそろ〳〵さ彼う心と

推量るう途中すて我と合戰〳〵我勢と遮止て三百
余人う討死とるうハ凡二時たしうよめうるへ〳〵
我勢長久手う二時おそ〳〵着たるハ三州勢たやそ
く弓取終るへ〳〵とつのりてうハそるのの先
鋒急けう後鋒つ〳〵けわの大膳のようう合て
時刻延〳〵て詮おさなうおをやおゼと下知〳〵へ
ハ平八郎いうう軍を仕掛ても秀吉卿の御勢をあ
〳〵もわ〳〵らそび前とつめつ〳〵押行と見て平八郎
おい口惜秀吉卿おさうう急さあう我心とくや
悟うあ〳〵とおわえてう其儀ふ〳〵い様うそあと永
井いつ〳〵ぞ與四郎いと聲うけあへい永井與四

卿つと罷出るや時刻よなりてひとしひもあえず乗替の馬と引放し持たる鎗の石突すて三頭のあたりと打しうへ馬へ驚さそ廻り逸参よ秀吉卿の胴勢のうちへ馳入たり元より沛艾の馬すてへあり見馴ぬ人よ驚さつく前後左右と駈狂ふ秀吉卿の勢へ踏ま〻蹴らま〻と列を亂して狂ふとる平八郎角と見あり馬とくを秀吉卿の胴勢よ近付へ荒よ荒さる荒馬ゑれと主を見知て一聲二聲嘶つく忠勝の馬の尾よ従ふていとのの静よ〻えけると後よ付つく馳うる上方勢へ三万餘りあれと見て忠勝の馬と馬しその妙と感しつゝおめえ

び聲と上てそゝめくとうけう秀吉卿へ此体と御覧し三州よへ能侍ありたのもしゝと仰らま放ま馬よ暇とりて十餘町の道とおくらうつるぞいそけいとけと押あゝ平八郎いゝもして上方勢よ喰付暇とくをんと様々よ計うゝうとも秀吉卿をてよ忠勝の心中と知あへへ前後よ下知して更よとう合をあとねへ平八郎もいゝ心中炎る如く秀吉卿とゝ長久手よ付あへへ味方をこゝある難義ゝるへ一刻もあゝよ暇とらをんと或へ先たち復へ後と三里半とうの処と四時あまりらうてとあゝたりけう

此一条篠木老人物語より沿て改む流布本より平八郎秀吉卿の陣より入て敵と突永井與四郎もまた同〳〵戰ふて足輕大將と殺とつゝふの總て偽說るとい是と削る抑秀吉の本意樂田ゟう長久手まて五里の処と三時とうゟ押て三州勢いまゝと引去さる間より寄ると主と〳〵忠勝の意ハ秀吉の兵長久手ゟいつゝると一刻も遲ゟう〳〵ハ味方長久手と去ゟ便ゟうらんとあつのゝゟあと元ゟう秀吉と戰ふゟ意なの〳〵只徒ゟ時刻を移さ〳〵むゟゟあり然ハ逸馬と以て秀吉卿の陣を〳〵弓鉄と放て陣法の進退と試む是条神速

ゟ兵と小幡ゟ收めらと〳〵急ゟ兵と長久手ゟ進めゟれ〳〵と其機ゟと一刻二刻の間ゟあり忠勝の兵と率て秀吉卿と追ふと豈必勝と期そるのゝとゝつゝくゝそたゝ秀吉卿と〳〵て忠勝小勢ゟ〳〵て跡と慕ふゝ伏あるゝ〳〵ゆ否と胸中ゟ疑と起さ〳〵め進むと遲ゟう〳〵めんとそるゟあゝ兵と論そるゝのゝ左意と密ゟ〳〵氣と静めて是おゝゝつさのゝ

加藤虎之助清正本多平八郎と論〳〵ゝゝ事

并秀吉卿両雄と論〳〵ゝゝ事

本多平八郎忠勝ハ黒革おと〳〵大荒目の鎧ゟ鹿角

の兜と猪首と著あり三尺二寸の太刀と一尺八寸の脇差と十文字とさし鹿毛の馬の太くたくましく丈八寸とあまれると黒鞍置浅黄のおしうけ浅黄段の手綱と田原正真の鍛たる鎗の穂先一尺三寸柄長九尺六寸なると握そくてぞ乗たりけると秀吉卿い馬廻りの侍ともと見廻しるひ三州侍と本多平八郎あくまさ侍りあ武遍い彼とおとらぬわとのの幾許もあるへし又勝りたるもあるへし心の底の謀さとくしてあと体と剛強あるのの多く得うとうるへし秀吉少き時とう侍とも大将とも多く出會たとともいつとも這虫とも思ひ

そんや心とうけしてなうらうへて打あうう志とくくも平八郎と馬の足なと恐ろしとおのとよいあと忘とを然して平八郎とらぞ不思議ある侍うあと溜息繼て宣ひしうへ御馬廻りの内とう福嶋市松正則そくこいそく何条さわとと忠勝と褒美あしるあると体の働い誰とそもなのしうくくへあのひいとぬのとと申けると聞食短慮なう正則と其方い後帯の頃ろうきくくさのと思ひしうい秀吉う人らしくなうつる時とあと呼ろう手許とて左様と口さく様ともなしつるなういつ秀吉わとの侍と敵とのちそ

ととなゝひて押行ゝことのあるぞ柔うなる舌と心なゝ動うびとなうるとと仰らるゝてうへ正則も傍を退さ何さま宰相殿と敵となゝそれとおゝゝあゝべ馬とくゝあゝて胴勢とさんう行列近く馬と乗付ゝこととなゝうゝと仰らるゝるゆゆゝ左へ有おゝさなう何さま正則いまぶてゝはさ大将ゝ折合つるとへ幾度といゝ数も忘とつれとも我君わとの人ゝ打並ひゝと一度もなゝ然るへ今日の本多う處置つるわとのとなゝとなゝつるとなゝ宰相殿の仰らとゝ処うべなうゝといひて後陣ゝ馬と打たうけるとのゝち片桐助作とめさるというゝ助作

承それ今秀吉と相並ひ馬すて押行へ誰人そとたのへへ三州侍ゝ本多平八郎忠勝なうと申をなう秀吉う勢へ三万餘人あるゝ平八郎をつうゝ三百余人の勢と以て少もおめ尺おゝゝあゝゝ剰鉄炮と云ふちうけ又へ馬と放ゝて行列と盛そと如何ふる心と見るゆ軍と持ゝう持さるう汝う心ゝ分別ゝて見ゝやと宣へへ助作うゝこまう何さま仰の如く殿わとの大将とおゝゝ並つて馬と打ゆのゝ軍と持ぬのゝありとも覺え尺ゆ但三百計の小勢ゝてゝの大軍とちとも怖とを打寄ゝゝ打ゆそいうなる心うゆゆと先程ゝう了見仕りて見ゆゝ忠勝長

久手の後援とゝて馳向ひゝよ計らび御勢よ出會
ゝよゝう爰すて一合戰仕う其身ゝゝめ一人も殘
らび討死仕ゑゝ〳〵おのゝ定めゝのなるゝゝゝ
然るよ殿の仰とゝて諸勢と取ゝつめ此方ゝうゝ
ゝゝをゝゝゝゝび忠勝も詮方なく〳〵静うよ馬と打て
ゝゝのと分別仕ゝと申を秀吉卿助作う申処ハ
見たるゝゝの処ゝゝと平八郎う心よあらび今を
ゝゝ勘辨〳〵て見ゝゝゝと仰らるれハ助作首とゝと
むけ打うゝ〳〵考へ見ゝとも思ひ得ぞよゝも不審
けよ手綱と取つゝ御供と秀吉卿五六町とうも
過さとゝゝて助作いうよ思ひ得たりゝゝやと尋ね

ゝゝゝゝう助作手綱うゝいうう馬立直〳〵鳴呼平八
郎ハ當世ゝれゝる勇士うゝ我君の左様よ奥深く
思召ゝ事今すて誰うゝゝゝゝゝる更よ別よたのゝよ
ゝゝ事なゝゝゝと申上ける時虎之助ハ御馬廻りの
目付ゝゝハ赤革おゝゝの胴丸よ桃實の鉢よ長烏
帽子うけてゝれと着〳〵椽深よ蛇目と白く散した
る羽織さて五尺七寸の太刀よ二尺一寸の脇差さ
〳〵青貝の槍の一丈二尺ゝうよ一尺八寸の片鎌
の穂の氷の如くなると握四白の馬の大さなるよ
梨子地の鞍置武藏鐙よ引両の手綱めえ立てゝう
の紅の厚ふさのおゝうけ掛て乘たりけるうちつ

かに馬を打寄て御尋もなきに申上候事その恐少
なからず候へとも胸にうかひ候事申上候ハてハ
かゝるも口惜く候へハ申上候なり抑本多平八郎
當御方の陣押に目を付候体をさらと存付候ひし
により御先と御後とへ申付て弓鉄の配を操替て
候へハ按の如く鉄炮を打かけ申候により御勢に
めさく下知仕り候に若き衆なく〳〵かねて應の筒
を打て候まて當御陣の御備立三州風に列ねあひ
しことを忠勝たしかに心得候と見えなから猶も試
さんためなるへし林の蔭に伏をたてゝ當御勢の
うけ方を探り知て候是ハ三州勢の中より味方へ

志を通さんとのへおうなしを探り知へき術と存候その
のち馬をさへらせて御行列の内をみださせ候事長久手の御
着を遅くして三州勢の引上る間に合をすまじき為と覺候
但あまりと本多か當御陣よりうかひ候を少しも知をなそん
ぬけしさうまて脱し候事近頃殘念に存候清正一馳向ひ一當
あてゝ見候へやと申まうさハ秀吉卿左なから能も平八郎
か心を得たるものかな去なから其方罷向ひ本多にものせん
と無益なるへし止ねやかしと仰られしかとも清正今年廿
四歳ちともおそれぬ若ものなり手綱かいくり馳出しそれへ打
なふハ三州まて名譽の侍となの頃世に沙汰とる本多平八郎と
覺たりなましハ羽柴宰相の御内に加藤虎之助清正なり見參

そんと呼それハ平八郎左右とうへうし牧總次郎三浦九兵衛を以て
答ふる様羽柴宰相殿の御内ゟ加藤虎之助と申ハ人あると久〳〵く
承とり及ひ忠勝いとゞ見參ゟ入つゝゆへとも手すゝゆの長久
手ゟ在陣仕ハ処へ宰相殿の寄ゟ承とり急き長久手へ罷越主の
前ゟ立可申と路次とゝめ申ゆゟとり何とりも心をゝとゝてハ加
藤とのと初ての見參ゟ心静ゟ申承とり度ハ依て今日ハ御意
得不申と申をと平八郎申付てゆとハひとゝて馬と引うへ〳〵長閑う
ゟ馬と打平八郎ゟ追付秀吉三万餘の勢ゟとゝ〳〵も恐怖をハ
引とり〳〵打たり〳〵ハ目覺〳〵とりひる次第なり

流布本ゟ本多忠勝と加藤虎之助と組打のゟあり偽なり故ゟ是を削る
忠勝今年廿七歳鉄炮弓の足軽を預り物頭なり手を下して戰をゝとむ人あらん

重修眞書太閤記九編卷之十八終

重修眞書太閤記九編卷之廿九

本多水野夜討を議とる事
并羽柴方五ヶ所伏勢の事

去程ゟ本多平八郎忠勝ハ加藤虎之助清正ゟ辭を
うけとりとも長久手表の事と機遣とり〳〵思
ふとのう私の見參その暇ふ〳〵とのひて路次を急
きひるとのう羽柴宰相の勢ゟ先とつく長久手ゟ
馳付見とハ上ゟハとゝゆ御勢を引上らゝ雜兵末々
ゟうとる迫一人も殘さゞらふ小幡の城ゟ引入ゟ
つゝ〳〵跡ふり〳〵ハ忠勝天ゟ仰き地ゟ俯まとゟ

神明に通じ給へる名大將うゐ如何にして羽柴宰相の大軍にて寄來ると知食たりけんと涙を流して感しけり是い本多酒井其外諸物頭衆にも秘し給ひ甲賀の忍びと御旗本に召仕ふをゐひつるとへ長久手におとしーすーても樂田の車い云に及ぶ關東越後上方四國九州のたゝ〳〵迫たしうに知をゐふゑ理あり羽柴宰相秀吉卿その夜戌亥の刻に至て漸龍泉寺の麓に著るつい長久手にて敗軍をし士卒追々こを來う軍い己刻にたち〳〵あゝ午の刻に終りてゆひーゝ三州勢あゝさ此方を取切ゆに只今をつうに爰ずて來りゆと注進を宰相秀吉

卿敗軍い是非もなし但三州勢勝軍にわとう首塚築んといまさ長久手に在陣をるなりんいゝゝ〳〵と問ゐへいされいゆ三州勢森池田以下名ある人々の首を取りさを乍に何方へう人數を引上いて戰場のあさうに烏多く群りて死骸をあさりゆと言上び秀吉卿躍り上り〳〵何と申を三州勢長久手を引上〳〵とやあこれ古今未曾有の弓取りか左樣のこへ秀吉ゐう外に知ずと思ひて遲滯をしこの口惜さ其上に本多平八郎ゆうゆうゆ〳〵も深意の有と知つゝたをうらをーへ何とを去にそも三州勢いつくへ引入しゆらんと云程のとあを只

今まて池田ゟ従ひ〻足軽走来う三州勢ハ小幡の城ゟ入大手搦手ゟ亂杭うち逆茂木引用心厳重ゟ籠らせいと注進ハ抑小幡の城と申ハ尾州春日郡ゟ〻て大永年中岡田與七郎とゝ〻しのゝ築さし処東西をまく〻南北長く二重ゟ堀と環らしたり小牧ゟハ行程三里ゟ近く長久手ゟ二里なりと云秀吉卿の陣をとゝまし龍泉寺ゟ其際ゟつゝ十七八丁とゝや賤ヶ岳の軍ゟ佐久間玄蕃中川瀬兵備と討とそのまゝ引返しあい柴田もあまとのゝく滅ひいをし〻池田勝入岩崎と落したらいそと功ゟ直ゟ引返したらんまへ此長久手ゟ先ハ

をし是等の事と思ひ合せて三州勢のゝゆく爰と引取し軍畧爭ひうゝとしと心の中まハおのそれつゝとも諸士の心と勇めんと思召つく然ハ小幡へ馳向ひ池田森ゟ為ゟ一戰をんと馬の首と立直しあゝとして稲葉入道一鉄をゝ〻出恐まある申条ゟいへとも夜をゝゟ戌亥の刻も過てひ夏の夜短くいへとも明日すていすた程遠く不知案内の処の夜軍ハ難義のゝと昔も今も申とゟひ御賢慮あるへくいと言上しひと秀吉卿も元ゟ左思召つるとなのれい然い老人の言ゟ従ふへ〻とて龍泉寺へ入御ありて一夜とあうゝあくまと三州

勢今十餘町こうも追討したらんよい秀吉卿の
先陣と行合たらんよ名譽の進退ふるとい秀吉卿の
龍泉寺よいるるろくやや御勢と引上らるといさ
めも勝よ乗ゐくべ神變自在の御軍法申も勿々か
しこしや本多平八郎忠勝い三浦九兵衛梶次郎兵
衛牧總次郎とこて秀吉卿の宿しまるべ龍泉寺
の体を伺くをけるよ志ろ〜有て三浦梶牧三人と
しう帰う秀吉卿よく〜勞とゐくと見え箭の影もか
そうよ門の内外うち開さ軍勢い鎧を脱そて兜を
枕よ大剛馬い鞍をろして休うくまるとよ打とけ
て用心の析もうさべと注進しけとい忠勝聞て何

様畫の行軍よ勞とゐくんとい勿論ふれとも夫れ
とよろつろさゐくよ大将ふ〜餘うよ怪敷とはう
去ひろう三人う見おとをこのやある罷向てた
しうよ見くやとて重ぬて松下勘右衛門向坂與左
衛門小野與次郎ひとさし遣らけるよ三人も走廻
う龍泉寺の大門裏門開放し箭いそて燒消しそ
の傍よ足輕とも眠ひけて前後も知ら猶奥ふ〜く
忍入本堂客殿のうとと見廻りひひしよ秀吉卿い
書院よ御止宿と見えゆつとも殘燈りけりそうよ
宿直の人ふうとも見えべ夫ふう裏門へ抜て帰り
ひと申けとい扨い三浦牧もう〜見たうと信と取

聽て水野總兵衛尉忠重と共に御前に參上し忠勝
今日秀吉卿の行列に押並ひ通行へ仕ひへともさ
したる軍も不仕ひ斥候をうけて龍泉寺の体を伺
ひ見ひに實に打くつろさ少も用心らしきことなく
三州武士を蚤蚊とも思ぬのとぬ風情に見えてひ顔
らくへ御免と蒙り今晩只今こそ一夜討仕り三州
武士の鋼をわるくて上方勢の肝を取ひしき可申
存ひと言上しけるに上ひに志きりに打笑てを
ひ忠重へ丑年の誕生すて四十四歳あるへし織田
殿の軍ふりも秀吉の弓失も大形に知ひへきに
今夜の夜討を望ミ思ふとのおりさきにいうす

ても夜軍危ふきものなりその上に秀吉わとの大
将に今すて親しくも思さに龍泉寺に入く左様
に打とけしとあそ心得られ彼夫へうの人の得た
る術りすてよも龍泉寺に秀吉へ居ぬくて忠勝も畫
わと秀吉と引とくめて長久手すて日のうちに押
をとるとと手柄とすて今夜へすつ休息をくさる
すても實に秀吉の陣うち処どころく探とようと
仰られけるに忠重も忠勝も肝をつぶ然へ
龍泉寺に秀吉卿へおとすてすきぬとも君に何と
して知食いそのと伺ひ奉に然へ其事あれ軍に
へ間と以て第一と思そその間に幾許の間あり其方

共の仕ひ覺えし間へ只一色なり此方ヱ召仕あるよ
間とて其方共も知ぬ事なりと仰らるゆゑ御
茶と二人ヱ下されたく〻体息いたしへき由上
意ありける処ヱ羽柴宰相秀吉卿亥の刻ヱ龍泉寺
と立をくるとて樂田とさしてひかへ龍泉寺ハ無
人城ある由と言上ひるゆゑのあり又ちとあり
龍泉寺の山蔭とよひ谷間ヱ六七千の人数をふせ
しと見え木の枝と折草を踏散しそゆと注進ひる
ものあり其時二人ヱ向てせゑひいるヱ忠勝た
しかに承られ其方ヱ所望と御許客あるべし荒増
定めて心ヱ落つらんと御笑ひあり其儘御座を

立をゑひそれより直ヱ御馬と引をくるとヱ小牧山へ
と打入あるヱ秀吉卿ハ龍泉寺ヱ御入あると直ヱ御
膳とめし上らるとカ藤福嶋片桐脇坂堀尾をゆして
三州勢定めて勝軍ヱ乗し此陣を夜打そへし其方
共五手ヱ別とて此山蔭ヱ埋伏し時分と見計ひ三
方ヱうちさし打へし又二手ハ後陣ヱ鉄炮を以
て攻へしと掟ゑひしヱ三州勢夜討もをひ早々小
牧へ御引返しと聞てその夜いつとも柏井ヱ宿
ヱ明日ハ樂田へ引取へしと定めらるとて堀尾茂助ハ
殿なり堀尾ちつらヱ龍泉寺と立といへとも墓ふ
兵も見えず龍泉寺の観音堂ヱ火と掛て立拂ひ明

とへ十日の辰刻堀尾茂助柏井篠木を過るころ一揆とも群り集り宿陣を十重廿重ゑ取巻しかとも堀尾へ聞えし勇士なり西門ゑ向て鉄炮を打て一揆と西ゑ集めさて東の門ゑり引去ける一揆あとゑり慕ひ來りしへ保木善右衛門並河平右衛門鎗と入て突破りけるうちゑ松田左近右衛門廣瀬專之助小野彌市取てうへ追ちらし一揆まと東西ゑり集りけるゑり堀尾茂助中村藤右衛門堀仁右衛門吉川新兵衛潮のゑ如くのうめく追拂ひしうへ一揆まと迎うくゑ堀尾引へ一揆まと起り立入替りいりめらと七度まてを返しけ

りされとも吉晴さる勇士なりとへ何となく樂田へおそ引入たれ

羽柴方三州方對陣の事

并二重堀陣夜討の事

去程ゑ秀吉卿へ樂田ゑ引返されて三州勢の寄來らんとと考へあひ樂田ゑり坤ゑ當り小松寺へ寇竟の要害ゑ此処ゑ本陣と移され堀を堀廻し柵をふり堅固ゑ備を立られ次ゑ三州勢の本陣たる小牧山の三方と取巻西へ日保の曼陀羅寺東へ二重堀ゑり小松寺ゑ引繼き北へ青塚小口樂田ゑ至りまて向城を取立人数を込らゑたり色々

の旗馬印の木間〳〵よりあらはるゝは春は松間の櫻よ
雲霞のうゝるゝ如く秋ふ〳〵へや〳〵染りゝる峯紅
葉の絶々と時ふ〳〵ぬ花うと誤たる是は池田勝入
齋ゝ中入を仕損し長久手よ於て多くの勢と失ひ
上方衆の心よ三州勢と始ての取合なるよう〳〵逆
打頁〳〵へ東國の兵士烈〳〵さ敵うと疑ひあのふの
のも多うれば夫等ゝ心と丈夫ふ〳〵〳〵めんと秀吉
卿のゝ〇てゝう心よ得あふ軍法ふゝ何さよ勝入
齋へ弱年ゝう世よ許されし猛将なうそれよ從ふ
侍いつよ一曲ふさへなし〳〵まこ森武藏守は三左
衛門ゝ長子すて鬼とゝはよし勇士ふゝ是等二人

をへ上方すて容易く思ふのもなく責むよとは取
戰へへ勝向ふよ敵ふ〳〵寄るよ防るのあるへう
びと頼これのひつるよ二人とも軟〳〵もうちまけ
あまつさへその身と亡ゝつると全く以て東國
武士の肝ふと〳〵鋼たけき故ふめと疑ふのも
多うると取〳〵つめんよへう〳〵の如く小牧山と取
卷て兵粮を断へ〳〵東國武士いうよ猛し共のの喰
てへ働うるす〳〵其兵粮絶て氣力とも衰へたゝん
時ふれと撃へ骨折をよあれと取へき謀ふうと十
万餘の軍兵の心よ會得さを〳〵処と後うそ思ひ知
よたるとそのゝち東西中と三つよ軍勢と引分ふよ

〻つ東備の左ハ日野備中守同彌次右衛門尉千五百餘騎と近江源氏佐々木の庶流より山崎源太左衛門尉行家七百五十餘騎池田孫次郎三百五十餘騎太宰少典中原勝良の後胤京都所司代として弓馬堪能と世に賞讃されつる多賀豊後守高忠七代同新左衛門尉常則三百余騎右ハ木村隼人佑千五百餘騎加藤作内光泰一千餘騎神子田半左衛門尉六百余騎左右合て六千餘騎但是と配るに廿五人と一手となり五十人と一隊とし廿五人の内五人を小頭となしたゝい一隊に十人の小頭あり兵粮玉薬の渡し方請取りと共とへさくの小頭して辨

〻東の二番左ハ長岡入道の嫡子長岡與市郎忠興生年廿三歳手勢二千餘騎して馳加らる次ハ高山右近大夫長房千餘騎右ハ長谷川藤五郎秀一二千三百余騎三番ハ中軍なり木下半左衛門尉七百騎中川藤兵衛一千百余騎長濱衆千三百餘騎德永石見守小川孫市以下其勢都合六千二百餘騎四番の左ハ金森五郎八入道二千餘騎右ハ高畠新次郎一千餘騎蜂屋出羽守千五百餘騎都合千五百餘騎五番中軍の大将ハ丹羽五郎左衛門尉長秀三千餘騎東備の總軍都合二万五千餘騎とうや西備の一番左ハ前野勝左衛門尉千餘騎生駒甚助四百餘騎

黒田官兵衛尉五千五百餘騎蜂須賀小六千餘騎明石與四郎五百餘騎赤松左衛門五百餘騎右ハ日野の蒲生忠三郎氏郷二千餘騎甲賀の伴氏一族千餘騎その今都合七千餘騎二番の左ハ稲葉入道一鉄二千餘騎右ハ堀久太郎秀政三千餘騎合せて五千五百餘騎なり三番ハ筒井の名跡四郎定次他の勢と組合せて七千餘騎を二つゝ今二段よりあれを備へたり但ハ六人を以て一組とし三十六人と一手となり七十二人を一備となす都合百備七千二百餘騎なり四番ハ秀吉卿の舎弟羽柴美濃守秀長なれ白五千餘騎を二段よりそろへたりその次ハ

羽柴宰相秀吉卿の本陣なり左の鉄炮三千百餘騎その次ゝ加藤虎之助百五十騎同孫六百五十騎竹中兵助百騎粕屋助左衛門尉百五十騎都合三千六百五十騎なり右の鉄炮三千百餘騎その次ゝ伊藤掃部助二百五十騎毛利河内守三百餘騎牧村長兵衛四百餘騎松下嘉兵衛百騎瀧川義大夫百騎蜂屋五郎助二百五十騎生駒市左衛門尉百五十騎矢部善七七百五十余騎柘植與八郎百二十騎池田久左衛門尉百騎山内猪右衛門三百余騎河尻與四郎百騎都合二千五百余騎二番ハ旗本備なりつの小性組七備佐久間忠兵衛伊藤忠藏池田與左衛門尉眞

野尤近勝吉佐藤主計尼子六郎左衛門尉勝間田左近太郎都合四千餘騎あり三番後備淺野彌兵衛長政千五百餘騎福嶋市松正則三百餘騎合そて一万余騎三手に分てそ備つたりそくて八万餘騎を東西左右旗本後備と五つに分配し残る三万餘騎を游軍とし左右にあるとたとひ小牧山に て此体を御覧し然れ此方すとも備を立るとの御諚にまかつ一万八千餘騎を十六段に おし東の野に先備三組を押出し鉄炮弓長柄をを間あ〳〵組合を一戦のうちに万卒を切あひけんと勇氣と満しと待りけたり次に五組是れ西より北に

おしむけて軍さらんとさ横鎗入んとうに へうその後に二組い先備を引上て息を継をん う為に先の戰に目とりけるとと掟らる次に三組と 雁行に立て敵の游軍を目に掛たり殘る三組い旗 本と後備となすあ但加様に備へ立るへと上方 勢ろうのらば此方ろう軍を始むへうとと さひ〳〵軍令を觸らるとろう上方勢も小牧山の備 そころる嚴重ふると見て侮りうさくおのひとう い牙とうを拳と握りあうう大将の下知かさふう のうう〳〵いつるも〳〵肩酢とのそそ和えろう三 州勢と上方勢と小川一つと隔てそその際五六町

よゝ過さうけつと然るよゝ二重堀よゝ備えとうゝ上方勢の色めくとして先備衆をゝ羽柴方ようゝゝ来るとその軍のなゝゝひ先をれいうち後るゝゝ頁るゝと常のとなうゝさや掛らんとのつゝも〳〵打立んとる景氣を御覽ゝ御使番を以て上方勢小松寺山を打立て二重堀へ向らんとをゝ合戰をゝゝへゝ左ゐさうちゝ更よゝ動揺をるゝ無ゝとさひゝゝゝ御さゝ留あうけるゝようゝのつゝも心得を氣をゝゝ見へつゝとも御使番らゝゝゝを通うて御諚を傳ふるゝ故よゝ勇氣を押えて陣処を守り居さうけうそのゝち忍ひを入てゝれを聞をゝゝ三刎勢へ氣をゝ

なゝう二重堀よゝ勢を出ゝふたゝゝて直よゝうゝ来らん其時小松寺山の胴勢を以て急よゝれを攻うつへゝゝと計りゐひゝよゝ三刎勢へゝつめて更よゝ動さゐをゝゝゝ二重堀の上方勢とも小松寺山の胴勢の押つめらゝひ様よゝゝと本陣へ申けゝとも秀吉卿よゝ三刎勢よゝ切うゝらぬよゝ此方よゝ軍を始むへゝゝゝゝと御下知ありけるゝようゝ二重堀のものも大よゝ氣をおとしけるとなうそのゝち秀吉卿へ羽黒の要害を修理あうて同十四日よゝ堀尾茂助吉晴山内猪右衛門一豊伊藤掃部助を以て城代となされそのゝよゝ十四ヶ処の向ひ城をうまへられ同

廿二日より秀吉卿六万餘騎を引卒し青塚より押出し二重堀の要害と巡見し黒田官兵衛木村常陸介神子田半左衛門尉明石右近等と打寄て止め置と小牧山より出さしし斥候の徒らを追うて二重堀ハ無勢の由と注進しけるより水野總兵衛尉本多平八郎ふさ時節あり一夜討して高名をとやと思ひ此事と願ひ申けるへハ御所よりも然るへし但左様の軍いとやく込入て早く込うとと以て手柄とと両人とも能心得ると御下知ありける より両人うとまり勝うとる兵五百餘騎二手にうけて子刻とうより押寄関を作り鉄炮と打うけ畑の下より鎗と入て突たてうハ二重堀の砦ふ居たるのの共大より狼狽しける内より也神子田半左衛門日頃より也似と眞先より迎たううハ三州勢おのひのまくより打勝うと塩合より引上たり

別本家忠日記より二重堀の前東野より陣をうハ酒井左衛門尉井伊兵部松平主殿助あうといふ十七日松平主殿助外山の城と守りせ二日秀吉卿青塚よりいさる木村常陸介神子田半左衛門小寺官兵衛明石右近二重堀の留守たり信雄の兵二重堀の無勢と見てとと撃首級と得たり細川忠興苦戰と神子田秀吉のためより殺さるとあり

重修眞書太閤記九編卷之廿九終

重修眞書太閤記九編卷之三拾

後藤又兵衛高名の事
并加賀井竹ゝ鼻落城の事

水野總兵衛尉忠重本多平八郎忠勝両人二重堀の要害へ夜討をしよ神子田半左衛門尉ゝ持口一番ゝ攻破らゝ平左衛門尉いろゝしけん日頃ゝも似ゝ眞先ゝ逃去けるゝとゝ此手い念なく破らゝ

ゝけゝ長岡與一郎忠興横合ゝう突ゝゝう手痛く走廻ゝけゝゝゝう寄手も殆難義ゝゝゝ名ゝ貞水野本多ゝゝゝへ合印合詞を以て敵味方混雑なく

火水となりて攻立けるこゝろ木村常陸介ゝ備も責崩されて黒田ゝ陣へそめ〳〵りける黒田官兵衛へ世ゝ許されし老練の侍なり夜討入ぬと聞や否諸侍と下知して物具さを弓鉄炮を配り持場〳〵へ亂さびまく〳〵ひまゝ手勢大うゝ立定りけるうち後藤又兵衛基次生年十七歳力強く肝太く古今無雙の若者なりけるゝ〳〵め夜討の入〳〵時眠入〳〵傍輩と呼起し鉄炮の空發と放を寄手の心と驚や〳〵猶豫をる処と得たりと鎗長刀の衆と催ふ寄手と支えさをそのひまゝ素肌武者といさめて物具させをゝとしける故ゝ黒田ゝ陣へ忽ゝ用意嚴

重ゝ調ひけゝ水野總兵衛尉忠重ゝ手ゝゝ二本松五郎兵衛と名乗て眞先ゝ進ミ黒田ゝ手の者三四人突伏てさらく所へ黒田ゝ侍ゝ栗山四郎兵衛二尺五寸の大身の鎗とゝて拵向ひ一合一離ゆ〳〵志〳〵〳〵戰ひけるゝ二本松一聲叫んて進むと見と栗山左の股と突とてそゝゝ倒とあゝゝ二本松ゝ肋とくさと突深手なれハ二本松そのまゝ俯に伏て息絶たゝ栗山起上ゝ二本松ゝ首と討水野總兵衛ゝと見ていゆ〳〵黒田ゝ陣へ備堅固なゝ夜討故實固さ陣とへ攻るなゝと早引ゆつと諸卒と下知して引上たゝ後藤又兵衛ひとゝとゝてきゝ

なる夜討の有様ゆいて追撃てくれんとと聲を揭つゝ木戸とをつうと閉たりけるを黒田ゝ勢共不審をゝ〳〵ゆゝ〳〵迫のろさ寄手なうられと追ハ三州勢の本陣迫も付入へきさゝ追うと見をて木戸と閉ゐふと何事をといをて又兵衛されハひ我等ゝ父の常ゑ談うをいひ〳〵夜討い鵜川ゑ鵜を遣ふゑ似たゝ易さいとゝう拔おゐゆゑとハ亂と〳〵糸ハとのつゝうゝぬくるゆのなゝ備ゝ陣と先ゑ破とハ備ある陣ゑをおのつゝうゝさをゝ立ゆのゑをあゝけゑ迎る勢をい追ふとなうゑと迎ぬ勢ゝ跡へ入と申いひ〳〵と常ゑ忘とをひ故ゑ今夜も木戸と閉てい

とゝをれてゝつとも感心〳〵實ゑ重代の侍ハ世々の庭訓たのゝ〳〵と松明とゝ〳〵てあさうと見をとハ水野方牛尾大藏高宮式右衛門吉田彌右衛門水野三郎右衛門黒田ゝ陣の後ゝ火とうけ〳〵とハ後藤又兵衛ゝけ廻り木戸と閉〳〵ハあの為をゝ狼狽をて歟お笑るなをゝ火とをゝ〳〵用心をゝと下知〳〵つゝ高宮武右衛門と鎗と合を五十餘合突合けるゝ基次上鎗ゑなゝ武右衛門と突落〳〵ける処へ水野三郎右衛門長刀と以てをゝ〳〵とハ又兵衛ゝ得たうと拭向ひ拂へハうけ雜ハ〳〵つゝ鎗の秘術と盡〳〵て戰ひけるゝ水野ハ聞えゝ長刀達人ゑ

う水車ふ廻しておとうろる勢ふ又兵衛おのと
びあとどさうして扣ゆると水野もよさ折とやお
のひけん高宮と助けて引上たり本多平八郎い敵
の陣をおのふすふ打破りたるうあふ火をさ
して手輕く引上たり敵うこふそもさてふ一火と
しあさんとひしめくあとふ本多と追のなうう
しうい本多い静ふ隊伍と調へ勝関と上て引退さ
たり秀吉卿い神子田半左衛門とめさふ三列勢夜
討ふ入し時いうふのの陣相應ふうをさつるふ其
方そうう逆のひて手ふ逢ふ臆病の至あうと怒ら
ふけれい半左衛門大ふ恐ふ實ふ以てうとあう

入てい陳し申をふ。彌以て偽ふ似て憚多くいへ共
書のあと軍のあいうんと成あと氣とつめそいへ
い夜ふ入て士卒何ふも疲ふい故夜討と申と其ふ
ふ走出外すて支度仕りいなといこしい処某う陣
とそそて黒田木村う陣へうりい故引返し可申
存いへい士卒いあく狼狽仕りいと勇めい内ふ夜
討の三列勢手輕く引取いふあう事ふ遇不申残念
至極ふいと申をし申と聞召さあいひそ其方らめ
て我許ふ来う仕へ時い草履取一人若黨六七人
ふ及ふその身い昔の半左衛門すて郎等い昔の百
陪あう是その方身ふ取て百陪の御恩と知へし然

幾陪の御恩と報ずるそたしなんと申さと仰らるとしなんい半左衛門尉大と恐怖したりけり黒田官兵衛尉い陣所と取静めその上と敵と討取しと莫大の忠勤るりとて御感あさらんとし後い上方勢も三列勢も互と用心らしてけるとい夜討もうらんびうけもをび陣所くと畫い編木夜い析木篝の影油断なくもと見えたりけると秀吉卿い熟と三列陣を伺ひるとき間ふけるとい此上いよつ信雄方の城々と攻破るへし然らい鳥の羽翼殺り如し自然と縮めて氣と屈し可申とて江列日野の蒲生忠三郎氏郷と大将として美濃國海西郡

加賀井の城と神戸彌五郎加賀井彌八郎り籠りたると責らるとけり

別本家忠日記と五月一日秀吉堀久太郎秀政と樂田と とめ加藤遠江守と犬山と留守たらしめて軍と帰し戸嶋の東藏坊と陣し二日猶東藏坊と宿し三日信雄小牧より軍と伊勢國河内城と収む秀吉卿尾列中嶋郡富田の寺内と陣と四日濃列加賀井の城と攻城主神戸與五郎援兵千草三郎左衛門林十藏加藤太郎兵衛らく拒さ戰六日鶏鳴と城門と開き切て出千草林とらしめ城兵戰死をとわり

城中よりハ信雄ゟ加勢とゝて千種三郎左衛門濵田與右衛門小泉甚六林十藏加藤太郎右衛門等を籠らるゝ所ゟ戦ひける氏郷今年廿九歳世ゟ許されし名将なれハ方便をゝ様々ゟ責たゝ城中力盡て和睦を請とゝとも寄手更ゟ許容をゝ城中すゝもあされとゝ如何とゝ評定しけるゝ加賀井彌八郎進ミ出て申けるハ和睦をんといふものゝ許容をぬ寄手の心中さこハ城中のゝ皆殺さんとあのゝ人ゝ然ハ我等も切て出寄手を切破り突殺し大将氏郷と打て取ゝ方なゝハ一方打破り信雄のおゝ

ひ処すて罷越軍の様と注進申へゝと云けるハ何も此義ゟ同しつゝ城兵千三百餘人大手の門を押開さとつとおめいて切て出寄手ハ城中とあのひ侮りうゝるへゝとあのとぬハ以の外ゟ周章し突散されて見えけると氏郷旗本と以て切ゝゝ自身ゟ鎗と取て突立しゝハ蒲生ゝ郎等上坂左文次坂藤八小坂新左衛門相續き一足も引しと進ミてゝしゝ廻る城兵すゝ散々ゟ突すけたゝ千種三郎左衛門ハ寄手七八人と突ふをゝとへゝ寄て息繼居けるゝ氏郷ゝゝとゝ千種三郎左衛門めらゝしゝやと聲ゝゝとハ千種も氏郷とハ見知たゝ心

得てひとしきりうつゆく上段下段と突あふと
ゆ千種ハ老たり氏郷ハ血氣さうの若武者なり
終ゆ千種と突ふをて首と取んとうけゆる処へ林
十藏らしきを掛て見事ゆひ御大将一鎗參りけん
と云うと見ゆハ操出ひ長身の鎗の光りハ電光突
つりうれつのこあくと勝負付ねハ近寄て組んと
をるゆと乘違へ扣さたつゆとハ十藏も近寄うゆをた
たゆふと氏郷をゆんて突出ひ鎗ゆ頬先突貫うれ
ひるむ処とうけ寄て又一鎗内兜のうつゆとをつう
ゆて十藏ハ馬より下へ眞逆ゆ落たりけるをゆと
見るより蒲生の郎等らしきゆと寄即首を打落を小泉甚

六小坂新左衛門と太刀打して東西南北客地主地
入替りしに戰ひしうとも いうゆうしけん甚六ハ躓
く処と新左衛門らしきゆと寄て無手と組ふをて いハ
ゆ合けるゆら新左衛門終ゆ甚六を組ふを押えて首
とらゆ落ゆ濱田與右衛門ハ上坂左久次と鎗を合
を濱田ハ左久の弟子ゆて尾州ゆ聞えし達人なり
上坂ハ江州ゆその武邊者ゆ互ゆ面を知たる中
なゆ上ハ日頃の辭とをらうしゆ追つおとれつ突合
しうら上坂ハ鎌十文字濱田ハ三尺あまりの大身や
ゆ鋒らう火と出して戰ひしうら上坂ハ鎌を濱田ハ
弓手の腕ゆ引うけらゆと終ゆ濱田ハ突伏らゆとそと

よて討死したりけゝ神戸與五郎加賀井彌八郎ハ
此ひゝよ尾州とさして落延たり軍終りて氏郷上
坂小坂と呼て此鎗見よといとれしまゝ二人立よ
つゝ見しい鎗の塩首すて血よとゝまり白柄ハ朱
柄となりつゝと穂先いとゝも疵つゝ此ハ安土
の廣間の鎗よ右大臣殿の御心を用ひられし關鍛
冶ふるへし隨分手よ合鎗ありとあとゝまり秘藏を
られしなり秀吉卿ハ加賀井を攻落しそれより竹
鼻へゝをゝまさり

別本家忠日記ハ天正十二年五月六日竹鼻を圍
む秀吉木曽川をゝ入十日竹鼻落城とあり

竹鼻ハ不破源六ゝ居城ゝり信雄公の御味方とし
て堀を幾重ゝ堀廻し堅固よ見えけるハ秀吉卿御
覽し是ハ一旦よ責ゝ〻しの急速よ攻んとをハ
味方も若干討るへし攻様ゝそあれとて一柵市助
よ仰付らゝ城の前後左右よ町屋を作り小路を十
條よ分ち小屋をうけ敷十五間馬踏六間高さ八間
の堤を築木曽川を堰入しうハ暫時よ水ゝさ増う
城中忽よ海となりけるゝ不破源六様々よ急狀
しゝ城を渡し是も尾州へ落たりけるそのゝち一
柵市助を竹鼻の城主となしまゝ多藝郡直江の郷
よ要害を築き丸毛三郎兵衛を入置よしとなり

別本家忠日記に六月十日一柳市助竹鼻に入て
戍る秀吉郷大垣に入といふ小牧山と大垣とを
て二三里を隔つ又云十一日秀吉多藝に至
り直江の要害を築くとあり竹鼻と加賀井ハ木
曾川を隔て東西相近く竹鼻と大垣とハ其間二
里許あるへし

秀吉郷小牧山へ戰書の事
并長岡與市郎使節の事

秀吉郷二重堀夜討の後をて樂田を引たらんと
なすあるひけるを見て加藤虎之助清正福嶋市松正
則御側へ伺候し申上ハも恐入ひとよハあるとも

大軍を擧て爰すて御出陣あらと長久手表の一戰
に味方の大將を討をそれより長久手へ御出張あ
つるとも敵軍もなく爰のとへ御引返し
爰許すてもさしたる事なく剃夜討のさめに一陣
を破らるとふ〻又御帰陣の御催ハ何ある思召に
や小牧山に籠りハ三州勢何わと猛しとも我々御
先手にそなへ君の御軍配を以て一責をあらさひ
てハ三州勢とのこ落し信雄公を取奉んと左のミ
骨折申すしと申けるハ秀吉卿打笑ひをあひ其方
達ハ秀吉の筑前守といひしあるう手元に生育
つるとハ秀吉の心を知つらんとおのに左様ある

凝験と申さよ知をい談りて聞をへ〳〵信雄公の三家老と殺〳〵めんとい全く秀吉と心安く語らふと
おかしめしての御誤なりそれゆう秀吉と殺さんやと思召立しも讒者の申行ひし故ありされとも
弓失の上よて秀吉うカとも御覽よ入まさ軍とい
ふのの〳〵六ケ敷とと見を奉らんと存してなう三
州勢ハ元ゆう秀吉と深さうしこふけとハ又他と
とるゆ〳〵ともなしたく〳〵三州ハ故殿と厚さ好わ
ゆう故よ信雄公の御頼よゆう出張あうしなう無
人の御車ととさへ忘とあとびいとそんや現在親睦と
むつひたくんよハ世と謐めん為よ第一の方人ふ

るへ〳〵抑故殿の御本意天下と切修めとさへて天子の
勅を仰とと太平ふ〳〵めんとなう秀吉もおれと受
継奉うて一日も早く世の中と静謐をしめくゆと
おのよなう秀吉う身と暖うよし秀吉う腹と肥さ
んとさハあ〳〵北畠とのの〳〵秀吉と殺さんとおわ
しめしつるとおのひ返さとおそん為よ起をし十
萬對の軍兵ゆう元ゆう北畠とのと傷さ奉るへき
心よあ〳〵ぶまして是と亡し奉らんとい努かおの
くゆとなう三州ハ其方人なう當の敵よあ〳〵ぶと
仰らししらハ両人も秀吉卿の本意と聞何さよ柴
田瀧川ふとのたく自己の威とくうとの上の福と

専ら戦て地を奪ひ民を害ふそうへう
見さるのと同〳〵うべと舌を振ふて感しけう
その〳〵ち秀吉卿い小牧山へ一通の書翰を送られ
けう

態令啓上い北畠殿誅戮無實之老臣等不被顧百
姓之艱難い車國主之恩今頗以闕如ひ剩為打滅
秀吉被起軍兵い条以外之御義乱抑秀吉之不義
何事哉秀吉昔日為織田家之賤臣今日為朝廷守
護之臣北畠殿猶以為昔日之賤臣之思而欲害朝
廷守護之臣者悖逆之至也三州亦荷擔之其意不
審尤甚早改悖逆與力之念慮者班干戈休息兵馬

為天下太平之始者如貴報於大坂待之者也恐惶
謹言

五月二日　　参議左少将秀吉

三州御陣所

三州陣りて此を御覧ゑ備えーうい秀吉のいくる
ふ処左至極をり當方元より北畠殿ゑたのまれつ
るゑりて出陣をーなう秀吉ゑ於て意趣ゑーま
た恨もなーー秀吉兵をうへさんといくるゑと此方
りて追ゑ及とび返事い大坂へといふとあくて

只今返事とるゝ及ら〻然い當方も一まつ帰陣と〻〻と仰らるゝそれ〻〻御用意あり〻〻となり

別本家忠日記ゝ天正十二年三月七日濱松御首途八日岡崎ゝ著御　九日岡崎ゝより御首途　此日北畠殿の軍兵伊勢國亀山城とゝ云ふ嶺の古城ゝ楯籠る　十一日池田勝入ゝ手ののの犬山ゝ入　十三日犬山池田勝入ゝ降る　十四日三州勢来名ゝ至り〻〻処清洲ゝ御帰　十五日小牧山ゝ御出陣　十七日羽黒合戰森武藏守敗走　廿一日秀吉十二万の兵大坂とゝ發ゝ　廿三日三州方ゝて蟹清水外山村宇田津村要害とゝ修理あり　廿四日三州方北良の城小幡の城とゝ修理あり　廿七日秀吉犬山ゝ著樂田羽黒邊巡見小

牧山ゝ對〻向城とゝ取立る　廿八日小牧山とゝ御本陣とゝ定めらる此夜三州勢秀吉の陣〻夜討とゝ　四月三日外山ゝ兵とゝ置る　四日池田勝入三州〻入んとゝ議とゝ　五日秀吉樂田ゝ陣とゝ　六日池田森三好樂田ゝより三州ゝ趣く　七日篠木柏井の一揆池田森三州〻發向とる由とゝ告　八日酉刻三州勢小幡ゝ入　九日岩崎落城　長久手合戰三州勢小幡ゝ入夜小牧ゝ帰る　秀吉龍泉寺ゝ至り三州勢長久手とゝ引取とゝ聞夜中樂田ゝ返る　十日秀吉小松寺山ゝ陣とゝ　十四日秀吉羽黒の砦とゝ修復　十七日三州ゝより外山城とゝ守らしめ　廿二日二重堀夜討　五月一日秀吉兵とゝ返とゝ犬山ゝ加藤遠江守とゝ置樂田堀久

太郎と置　二日秀吉戸嶋の東藏坊に宿と　三日信雄
勢州河内の城に入秀吉富田の寺に入　四日加賀井城
責　六日加賀井落城竹鼻と責る　十日竹鼻落城　十
一日秀吉多氣に至る　三州御所小牧に酒井忠次とお
うきて清洲に入御　海東郡戸田に御動座とあり然れ
ハ小牧山に御座あり〳〵ハ三月十五日より五月十日まで
の間と聞ゆ
流布本秀吉卿書翰の一条全く偽なり今尾州起の農
家に傳ふる処に從ふ

重修眞書太閤記九編卷之三十終

三都書林

三條通升屋町　出雲寺文次郎
心齋橋通北久太郎町　河内屋喜兵衛
同　博勞町　河内屋茂兵衛
同　筋本町角　河内屋藤兵衛
日本橋通二丁目　須原屋茂兵衛
同　二丁目　山城屋佐兵衛
同　小林新兵衛
芝神明前　岡田屋嘉七
本石町十軒店　英大助
大傳馬町二丁目　丁子屋平兵衛
横山町三丁目　和泉屋金右衛門
淺草茅町二丁目　須原屋伊八
筋違御門外榛籠町二丁目　紙屋德八

林書籍 三

趙嘉門窺探門	二冊	八	合産
新草紙	二冊	八	京屋
難山四三	二冊	八	伊屋
大學問	二冊	八	金屋
本草四十	本朝十冊	八	泉屋
芝斬問	同	八	滿兵衛
同	二冊	八	平屋
同	二冊	八	大助
日本藏本	二冊	八	嘉屋
同	同	八	新兵衛
同	同	八	林屋
四齊藏	同	八	山城屋
三新顛	同	八	源兵衛
		八	河内屋
		八	藤兵衛
		八	河内屋
		八	喜兵衛
		八	文助